萬葉集東歌研究

相良うみ

第一章　挑発表現

第一節　「ネ」

萬葉集相聞歌の中に、度々目にすることができる単語「ネ（寝）」がある。この節ではその「ネ」がどのような表現内容を持ち、歌の中で使われているのかを見ていきたい。ここでは三五種類、三〇七例の「ネ」を取り上げて調査する。対象とした語彙は次の通りで、同義語「イ」も含む。

アサイ（朝宿）イ（伊・移・五十・宿・眠・寐・寢）イヌレ（伊努禮）イネ（寐宿・宿・寐・寢・稲）イネラエ（所寐・宿□所寢）イモネ（寐）ウキネ（宇伎禰・浮宿）ウマイ（味宿・味眠・味寢）サヌ（左宿）サヌラク（佐奴良久・佐宿）サヌル（左奴流・左宿）サヌレ（左奴禮・紗眠）サネ（左尼・左禰・左□宿・佐禰・佐宿・佐寐・佐□寐）サネサネ（左宿左寐）サネド（左禰度）サネニ（佐宿爾）タビネ（旅宿・客宿）ナサ（奈左・奈佐・眠）ナス（奈須）ナセル（奈世流）ヌ（宿・眠・寐・寢）ヌラク（奴良久）ヌル（奴流・寐留・所寐・眠・宿・寐・睡・寢）ヌレ（奴禮・宿・寢）ネ（年・禰・眠・宿・寐・睡・寢・念）ネザメ（寐覺・寢覺）ネド（禰度）ネヤ（房）ネヤド（寢屋度）ネラエ（禰良要・禰良延・所宿・寢・禮良延）ネロ（禰呂）マルネ（麻流禰）マロネ（末呂宿・丸宿・丸寐・丸寢）ヤスイ（夜周伊・夜須伊・安宿・安寢）ヰネ（為禰・率宿）―萬葉集総索引による。□は打消「不」の省略。

これらの使用箇所に注目し、巻毎に差があるのかどうか調べた。結果は左の表の通り。

●「ネ」の分布状況

巻数	数
1	9
2	14
3	9
4	17
5	7
6	3
7	5
8	13
9	11
10	22
11	41
12	32
13	24
14	48
15	25
16	3
17	5
18	1
19	7
20	11
計	307

表からは「ネ」が万葉集巻一から巻二十までまんべんなく使用されていることが分かる。また巻別に見ると、巻十四の使用数四八例が最も多く、次いで巻十一・十二・十となっている。次に「ネ」の持つ意味を使い、さらに分類をしてみたいと思う。

「ネ」の意味は、大きく二つに分けることが出来る。

①一人で横になる・寝る・眠る・ぐっすり眠る・宿を取る・漂って寝る・衣を着たまま寝る。動詞と名詞が混在するが、決定的な条件は一人であること、また人数的には一人以上でも、本来一緒に寝たい人物とは離れていることとする。人以外の物と添い寝をしている例も一人寝に数える。例歌は1・五九、4・五一五、18・四一一三、20・四三二一など。

②二人で横になる・寄り添って寝る・手枕をする・性的交わりを持つ。動詞と名詞が混在する。後に打ち消しが付き「共寝が出来ない…」のように表現していることもある。例歌は2・一〇九、10・二〇二一、12・三〇〇〇、14・三三九六など。

以上の二種類で分類を行なうと、結果は次の表の通りとなる。

●「ネ」の分類結果

巻	①	②	計
1	9	0	9
2	3	11	14
3	7	2	9
4	14	3	17
5	6	1	7
6	2	1	3
7	4	1	5
8	7	6	13
9	11	0	11
10	18	4	22
11	29	12	41
12	22	10	32
13	21	3	24
14	12	36	48
15	24	1	25
16	0	3	3
17	5	0	5
18	1	0	1
19	5	2	7
20	11	0	11
計	211	96	307

表の合計数から見ると、約七〇％が①に該当し、残りの約三〇％が②に該当していることが分かる。「ネ」は①の意味で使用するのがポピュラーであると言えよう。しかし巻十四は①が一二例に対して②が三六例。つまり①の占める割合が二五％で②が七五％と、全体で出した割合の正反対を示しているのである。つまり、東歌に限っては「ネ」の大半を②の共寝の意味合いで使用していると言えるのである。この興味深い結果から巻十四の歌に絞り、その歌の内容を見ていくことにする。

あらたまの伎倍(きへ)の林に汝(な)を立てて行きかつましじ寝(い)を先立たね　（三三五三）

女性と別れる辛い気持ちを、言葉ではなくその行動で表現するという、単純で力強い意志を感じる歌。野外での交わりを意味する「寝を先立たね」から、相手の女性に有無を言わせぬ挑発力を感じる。

筑波嶺の嶺ろに霞居過ぎかてに息づく君を率寝てやらさね

（三三八八）

当事者の歌ではなく、様子を見守る第三者の提案のような歌。「率寝てやらさね」の「ネ」には控えめな女性に対する挑発的なアドバイスと共に、「何をグズグズしてるの！」という年長者的な御節介要素も含まれている。

奥山の真木の板戸をとどとしてわが開かむに入り来て寝さね

（三四六七）

人目に付かないようにこっそり通うのが通常の夜這だが、この歌では「木戸をドンドンと押して開けるから」と言っており、通常男性が口にする「ネ」の表現を女性が使っている。奥手な男性に向かい、女性からけしかけた歌だろうか。大胆で積極的な誘い歌である。

川上の根白高萱あやにあやにさ寝さ寝てこそ言に出にしか

（三四九七）

「さ寝さ寝てこそ」からは、噂になってしまったことへの不安や畏れ、後悔などの気持ちを感じない。逆に開き直ったような堂々とした態度である。

伊香保ろに天雲い継ぎかのまづく人とおたはふいざ寝しめとら

（三四〇九）

岩の上にい懸る雲のかのまづく人そおたはふいざ寝しめとら

（三五一八）

この二首は構造と内容が良く似ている。「人々が言い騒ぐよ、さあ寝させろと」の表現は、迷惑や困惑を歌っているというより、いかに自分が魅力的かを表現していると取れる。「困るなぁ」と言いながら、まんざらでもない様子だろう。聞いている人に嫌な気持ちを与えるような自慢ではなく、明るく皆で笑い合えるようだ。

足柄の箱根の嶺ろの和草の花つ妻なれや紐解かず寝む

（三三七〇）

「花妻でもないのに…」と直接言わないところが男の優しい企みか、はたまたきつい冗談か。一歩間違えれば嫌みとも取れる、笑いを含んだ誘い歌と言えよう。

安太多良の嶺に臥す鹿猪のありつつも吾は到らむ寝処な去りそね

（三四一八）

最後の部分から「自分が想っているほど相手は想っていないのではないか」という男の自信の無さが伺える。それを「去るな」と強めに言い切っている様子が微笑ましい。

等夜の野に兎狙はりをさをさも寝なへ児ゆゑに母に嘖はえ

（三五二九）

麻久良我の許我の渡の韓楫の音高しもな寝なへ児ゆゑに

（三五五五）

右の二首は、噂に関する類似歌である。自分に不都合な噂なのか、好みの女性では無いと遠回しに言っている歌とも取れる。特に面白いのは「深い関係ではないのに母親に叱られた」とぼやいているところ。参っている様子が想像できる。

こうして「ネ」を含む歌を見てくると、それらに共通する一つの効果が浮かび上がってくる。それは「ネ」を使うことで様々な挑発をしているということである。初めの三首では、その積極的な歌い掛けと共に、言葉通り共寝の方向へ相手を挑発している。次の三首では「ネ」を公表することで周りの聴衆にプレッシャーを掛けている。また最後の四首は、歌い掛けた相手や聞いている人々に笑いを挑発している。

挑発は一人で行っても全く意味がない。相手がいて初めて効果がある。「ネ」はこのように「挑発」という要素を含んでおり、それが他の巻に比して東歌中に最も多く見られたということは、東歌の集団歌謡的性格を示唆していると言えよう。

第二節　人妻

始めに「ヒトヅマ」及びその類語の意味に触れると次の通りである。

ヒトヅマ（人妻・人孀・他妻・比登豆麻・比登都麻・人都末）
他人の妻、夫。
ヒトヅマコロ（比登豆麻古呂・比登都麻古呂）他人の妻なる女。
（コロは女・子どもを親しんで呼んだ語）[1]

このように「ヒトヅマ」は既婚女性、既婚男性を表す単語である。「ツマ」は女性からも男性からもその配偶者を指す言葉であり、女性だけを指すと限定することはできない。これら「ヒトヅマ」は、万葉集中に一五例見ることができ、その歌番号は次の通り。

1・二一、4・五一七、9・一七五九、10・一九九九、二二九七、11・二三六五、12・二八六六、二九〇九、三〇九三、三一一五、13・三三一四、14・三四七二、三五三九、三五四一、三五五七

しかし、13・三三一四の「ヒトヅマ」は自分の夫の不憫さを他人の夫と比べて嘆く歌であるので、表現の内容上この節の検証点からずれる。これを除く一四例を対象に考えたい。

「ヒトヅマ」の表現内容を考える上で重要な事柄、それは歌垣の存在であろう。歌垣は未婚の男女にとっては妻・婿選びの場として考えられていたとされ、歌われた歌の大部分は男女関係における気持ちを表現したものである。しかし9・一七五九の歌から、歌垣中の歌は未婚者だけのものではないこともうかがえる。「人妻との恋は古代社会にあっても基本的には禁忌であって、歌垣という祝祭的時空において、その祝祭の非日常的・非理性的転換を誘引するもの

としてある」と森朝男氏も述べている[2]通り、既婚者との関係は祭り空間だけのものであり、通常は12・三一一五のようにタブー視される関係だったのである。『人妻』という恋歌の歌語は歌垣の祝祭的転換を支えるものだから、これを歌えば一種の煽情効果があった[3]」とある通り、「ヒトヅマ」には辞書に書かれている意味以外に、歌垣に見られる非日常的な空気、非日常的なエネルギーを凝縮した意味をも持ちあわせているのである。これをふまえて東歌の四首に触れていく。

人妻と何かそをいはむ然らばか隣の衣を借りて着なはも

（三四七二）

この歌の解釈は諸説あるようだが、大きく分けると二種類。一つは「人妻だから」という相手の拒絶を受けて歌われたもの。二つ目は世間一般的に言われる人妻とのタブーに対して歌ったものである。前者の解釈によれば「男の求愛に対し、『私は人妻よ』といってそれを拒絶しつつ、さらに男の闘争本能や禁忌侵犯への欲情を駆りたてた[4]」とされる通り、正に男性が女性の挑発に乗った様子が伺え、スピード感や緊張感までも読み取れる、掛け合いらしさが十分に表現されているといえよう。

しかし、私はここで二つ目の解釈に注目する。「人妻と接触すると、どうしてそれを世人は非難するのだろうか」と口訳されている[5]が、次に挙げる田辺幸雄氏の説を参考に解釈してみたい。

これは一種の笑わせ歌と考えるべきものであろう。…これは明るい歌である。…この歌の生まれて来る背景事情として、一年二回程の燿歌会などの夜に限って人妻と交わることも大目に見られる風習というものを考えておくべきだろう。その時は神がこれを許すとはいっても、やはり多少は気がひけたはずである。そこでこの歌の論理を身によろうことによって、突進の元気をつけるという風にこの歌が用いられることもあったと考えるのである[6]。

この説をふまえると「ヒトヅマ」の効果を十分に説明できる。つまり「ヒトヅマ」という語が、掛け合いの相手にあたる一個人だけでなく、歌垣の場全体を挑発したのだと解釈できるのである。勿論この挑発は威嚇的な意味合いではなく、恥じらい・躊躇に対する突破口的役割を持った、元気のある挑発である。

崩岸の上に駒をつなぎて危ほかと人妻児ろを息にわがする

（三五三九）

崩岸辺から駒の行ごのす危はとも人妻児ろを目ゆかせらふも

（三五四一）

この二首には「駒」が使用されている。

東国の民衆にとって馬が高嶺の花であったことは上述の通り

だが、しかし入手できなくても馬そのものはかれらに親しい存在であったに違いない。これらを使役する殿に命じられて農耕に馬を駆り立てる事はあったであろうし、まぐさをやることもあったであろう。まして、崖の上にあぶなげに繋がれている馬や、殿を乗せて崖を行く駒を見る機会は、かれらの日常にいくらでもあったであろう。(7)

右の説を参考にすると、詠まれた情景を想像しやすい。崖っぷちにつないである危なっかしさが、乗りこなしていない人だからこそ感じられたものと想像できる。また、こうした日常を共有している者に歌い掛けて、初めて理解される表現でもあろう。馬の危なっかしいハラハラ具合に、人妻とのハラハラした関係を掛け、そこで怯むことなく「それでも命がけなんだ」と歌い切る。歌い終わった後に「うん、よくぞ言い切った！男前！」などという拍手喝采が湧いたと、想像できないだろうか。

こうして巻十四の「ヒトヅマ」を中心に見てきたわけだが、全体を通して言えることは、どの「ヒトヅマ」からも、エネルギッシュな勢いを感じることができるということだろう。これは「ヒトヅマ」という言葉の持つ、ある種の危うさ・危険な香りを利用していると言える。この禁忌を含んだ言葉をストレートに表に出すことによって、そこから生まれてくるエネルギーのようなものが、歌自体に勢いを与えたと考えられる。また、集団に対する勢い付けのような挑発、周囲に向けた宣言のような意志表明などから、巻十四においてはさらに明るさや笑いへ導く挑発の存在も認められる。

第二章　人物呼称

第一節　「コ」

東歌を読んでいくと人物呼称の使われ方に興味を引かれる。ここでは「愛する者」を意味する単語に注目したい。想い嘆き、慈しむ対象として詠まれる人物は、人・妹・背・君・吾・児など多数挙げられるが、今回は児・子「コ」に焦点を絞り、その使われ方を見る。

「コ（子・兒）」には数種類あり、特定の職業を表す単語や固有名詞もみられる。この節ではそのうち一八八例の「コ」を取り上げ、調査の対象としたい。種類は次の七種類。(8)

コ（古・故・子・兒）コラ（古良・許良・子等・兒良・兒等）コラガテヲ（子等我手乎・兒等手乎）コロ（古呂・古侶・故呂・許呂・兒呂）テコ（手兒）コナ（兒奈・古奈）コドモ（古杼毛・古等母・古騰母・子等毛・兒等毛・胡籐母・小子・子等・兒等）

まず「コ」の使用箇所に注目し、巻毎に差が見られるかを調べた。結果は次の表の通り。

●「コ」の分布状況

巻数	数
1	2
2	9
3	8
4	6
5	14
6	3
7	7
8	4
9	11
10	14
11	17
12	8
13	9
14	39
15	1
16	14
17	2
18	7
19	4
20	9
計	188

対象となる「コ」は巻一から巻二十にまんべんなく使用されていることが分かり、巻別に見ると、巻十四の使用数三九例が群を抜いて多く、巻五・十・十一と次いでいる。右の結果だけ見ても巻十四とそれ以外の巻における「コ」の使用頻度差ははっきりしているが、次に「コ」の持つ具体的な意味を含めて比較したい。

「コ」の持つ意味は、大きく次の二つに分類することが出来る。

①子供、親の対にあたる子供。例は、2・一八二、4・五三二、5・八〇三、9・一七九〇、13・三二二三など。

②愛称、親しい気持ちや愛する気持が込められている呼び名。例は、1・一、5・八四五、9・一七四二、10・二二一九、16・三八二四など。

先の「コ」一八八例を、この①②別に分類すると次の表の通りである。

●「コ」の分類結果

巻	①	②	計
1	0	2	2
2	1	8	9
3	3	5	8
4	2	4	6
5	11	3	14
6	0	3	3
7	1	6	7
8	0	4	4
9	3	8	11
10	1	13	14
11	0	17	17
12	0	8	8
13	3	6	9
14	1	38	39
15	1	0	1
16	2	12	14
17	1	1	2
18	2	5	7
19	1	3	4
20	4	5	9
計	37	151	188

表から全体の八〇％が②に該当し、①が二〇％を占めていることが分かる。これを巻別の比較と合わせると「コ」の大部分が愛称を意味しており、それは巻十四を中心に使用されていると言える。

次に「コ」が集中する巻十四に絞ってさらに細かく歌を見ると、いくつかの興味深い用例を見ることができる。一つめは、逢ったことがある、名前を知っている、男女関係を持ったことがある親しい人に対して「コ」という表現を使っている例（三三三六一、三五一三、三五二二、三五三二）。二つめは、名前を知らない、それほど深い仲になっていない人に対して「コ」を使っている例（三五三七、三五五五、三五六五）。三つめは、女性だけでなく男性を「コ」で表現している例（三四五八、三五二一）である。

右記の用例は巻十四によるが、万葉集全体に視野を広げると、さらに単数だけでなく複数を表す「コ」の用例も見ることができる（3・二八〇、16・三七九二、三七九四）。

このように「コ」は幅の広い語である。第一章でも度々触れたように、東歌はその歌の対象を広く多く設定している。また皆で楽しめるように、所々に笑いの要素がちりばめられていると言える。そうした東歌では「コ」の持つ、皆で共有できて誰にでも当てはめることが出来るという性質が重要視され、多用されるに至ったと考えられる。ユニバーサルな「コ」は、東歌の特徴であるとも言えるだろう。

第二節　固有名詞

この節では、前節の「コ」とは逆に具体性を持つ呼称、固有名詞について調べたい。東歌の中には、具体的人物を表現している固有名詞がいくつかみられる。

真間の手児奈（三三八四、三三八五）、石井の手児（三三九八）、可牟思太の殿の仲子（三四三八）、殿の若子（三四五九）

【真間の手児奈】真間の手児奈は下総国葛飾郡の娘子で、伝説の美女である。髪も梳らず、履もはかなかったが、望月のような面に花のような笑みをたたえた娘子の美しさは、多くの男を魅了して競い合わせ、娘子は身を投げて死んだという。その物語は3・四三二、四三三、9・一八〇七、一八〇八の歌から知ることができる。

三三八四は「伝説上の美女と自分との間が噂になっている、と戯れたもの。『真間の手児奈』の生まれかわりだ、と自分の相手の娘を自慢しているととってもよい」と森朝男氏の解釈にもあるように、[9]当時存在しなかった女性との恋愛を歌ったもの。実際にはありえない話だという所に笑いを含んでいる。

三三八五は、真間の手児奈の美貌を褒めたたえた歌。その様子を見たかのようにも取れるが、伝説上の人物ということを考えると、中西進氏の注釈「葛飾の真間の手児奈がもしいたなら、真間の磯辺に波もとどろくほど人々は騒ぎ立てたろうか」[10]が適当だろう。

【石井の手児】三三九八について「村一番の美女を独占したことで疎まれたのか」との注も見えるが、[11]これも前歌同様に伝説の美女だとも見られる。どちらにしても、村八分になった男の悲しい歌ではなく、明るい笑いを含んだ歌と考えたい。

【可牟思太の殿の仲子】都武賀野・可牟思太は共に所在不明であるが、殿は地方の豪族や首長階級を表している。この「可牟思太の殿の仲子」は「総領の若子より闊達で女性に人気があったか」[12]とされる。伝説上の人物とまではいかないものの、その身分・容姿・男らしさか何かで話題になる物だったのであろう。

【殿の若子】三四三八同様に、若殿さまを歌った歌。稲舂きを仕事にしているような女性が、若殿さまに毎夜手を取ってもらう間柄にあるとは思えない。そんなことからも、笑いを誘う冗談めいた歌で

あると考えられる。

以上四種類の固有名詞を見てきたが、これらに共通して言えるのは、それぞれが物語なり身分なり、広く一般に知られていた人物名だということ、そしてその言葉によって歌の面白みが出ていることである。またキーワードの意味が分かって初めて面白みが出てくる歌、言い換えれば誰にでも歌え、皆で楽しめる歌だと言えるだろう。

こうして巻十四中の固有名詞の使われ方を見てきたが、結論として固有名詞は、それぞれが持っている物語性や話題性を利用するために、歌の中に詠まれているということが言えるだろう。そしてこれは、誰にでも当てはまるという共通性を持った単語「コ」が東歌に頻出しているのと同様に、皆が知っているという共通性の高さを評価されて東国人に詠まれたのである。

追記として一つの推測を記しておく。

陸奥の可刀利少女（三四二七）　乎久佐壮士・乎具佐助男（三四五〇）　左和多里の手児（三五四〇）　はそれぞれ地名＋少女・壮士・助男・手児を含んだ歌である。これらの人物は何者か分からない。しかし、真間の手児奈・石井の手児同様に有名な人物の名前だったと考えることは出来ないであろうか。物語として後世まで広く残った人もいれば、忘れられてしまう人もいる。もし、ここに挙げた人物が何かしらの物語性・話題性を持つ人であったとしたら、私達は歌の半分も理解できていないことになる。しかしそれが逆に、私たちの想像力を刺激する古代の歌の面白みなのかもしれない。

注

（1）佐佐木信綱「萬葉集事典」（平凡社、一九五六年）

（2）（3）（4）森朝男「古代和歌と祝祭」（有精堂、一九八八年）

（5）小島憲之他「新編日本古典文学全集8　万葉集③」（小学館、一九九五年）

（6）田辺幸雄「萬葉集東歌」（塙書房、一九六三年）

（7）大久保正「萬葉集東歌論攷」（塙書房、一九八二年）

（8）これ以外の「コ」を含む単語、テコナ・コム・アコ・アユコ・イハヒコ・イヘノコ・イモコ・ウミノコ・ウラシマノコ・オホツノコ・カコ・カツラノコ・カヒコ・クワコ・サヨヒメノコ・セコ・ツマノコ・ナカチコ・ナクコナス・ハフコ・ヒトリコ・ヒモノコ・フナコ・マコ・マナコ・ミコ・ミドリコ・ミフナコ・メコ・メコドモ・メヅコ・モコ・ヤツコ・ヤトセコ・ヨチコ・ワカキコノ・ワクコ・ワクコドモ・クセノワクコ・クメノワクコ・ワギモコ・ヲトメコ・ヨチコラ・イズモノコラ・ヒトヅマコロ・イシヰノテコ・ママノテコナは、意味が特定できる、地名等により人物が特定できる、固有名詞である等の理由により、本節の検証点からずれると判断されるため対象外とする。

（9）森朝男「古代和歌と祝祭」（有精堂、一九八八年）

（10）中西進「万葉集　全訳注原文付（三）」（講談社、一九八一年）

（11）小島憲之他「新編日本古典文学全集8　万葉集③」（小学館、一九九五年）

（12）中西進「万葉集　全訳注原文付（三）」（講談社、一九八一年）

（二〇〇一年　卒業）